

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅲ

小無田遺跡

1984

育委員会

序

島根県立八雲立つ風土記の丘地域一帯は島根県下でも最も遺跡の密集するところであります。一方松江市の近郊で、近年宅地化がすすんできている地域であります。

このため島根県教育委員会では松江市教育委員会の協力を得ながら昭和56年度から年次計画で風土記の丘地内遺跡について緊急発掘調査を実施することとしました。その対象は出雲国風土記に記載された官衙関係の遺跡や寺院跡などであります。

本年度は從来意宇軍団跡あるいは黒田駅跡の存在する可能性が指摘されていた松江市山代町の小無田遺跡を調査対象としました。その結果、中世のころと考えられる多数の柱穴跡等を検出しました。本書はこの調査の概要であります。広く各方面でご活用いただければ幸いです。

なお、調査にあたり御指導をいただいた調査指導の先生方並びに御協力いただいた地元関係各位に対して厚く感謝申しあげる次第であります。

昭和 59 年 3 月

島根県教育委員会 教育長 栗 栖 理 知



遺 跡 調 査 区 状 況

例　　言

1. 本書は昭和58年度島根県教育委員会が国庫補助金を得て実施した風土記の丘地内遺跡緊急発掘調査の報告書である。調査は将来に予想される開発にそなえて遺跡の保護対策をたてるための基礎資料を得る目的で実施した。
2. 調査組織は次のとおりである。(敬略)

調査指導 山本清(島根県文化財保護審議会委員)、池田満雄(同)、町田章(同)、田中義昭(島根大学法文学部教授)、渡辺貞幸(島根大学法文学部助教授)、中山敏史(奈良国立文化財研究所)、田中哲雄(同)、恩田清(郷土史家)、横山純夫(島根県文化財保護指導委員)

事務局 美多定秀(文化課長)、藤間宇(文化課主査)、長谷川行雄(文化課長補佐)、岩崎況一郎(文化課文化振興係長)、吉井良夫(文化課文化振興係主事)、

調査員 遠岡法暉(文化課課長補佐)、勝部昭(文化課文化財保護主事)、松本岩雄(文化課主事)、西尾克己(同)、野上桂一(同)、中村慶子(文化課嘱託)、平野芳英(八雲立つ風土記の丘学芸主事)、村上勇(県立博物館学芸員)

調査協力 松江市教育委員会、八雲立つ風土記の丘、山代東自治会、山代西自治会、枕村喜則(島根大学理学部講師)、三島欣二(県立松江北高教諭)、花谷浩、落合めぐむ、井上洋子、内田雅己、実重史朗、松浦道仁、浦田和彦、長見康弘、松下知子

3. 発掘調査に際しては土地所有者秋山峰、梅原義夫、角敏郎、友田忠一の各氏をはじめ地元の方々に終始多大な協力を得た。
4. 掘図中の方位は真北を指す。遺構については遺構番号の前にS B(建物遺構)、S K(土塙)、S D(溝状遺構)という略号を付して記述した。
5. 遺物は島根県立八雲立つ風土記の丘で保管している。
6. 本書の編集・執筆は上記調査指導の先生方の助言を得ながら遠岡法暉、松本岩雄、西尾克己、村上勇、平野芳英、野上桂一の協力を得て勝部昭があたった。

目 次

序

例 言

目 次

I 遺跡の位置.....	1
II 調査に至る経緯.....	2
III 調査の概要.....	4
1. 調査区の設定.....	4
2. 第1調査区の遺構.....	7
3. 第1調査区の出土遺物.....	12
4. 第2調査区の遺構.....	16
5. 第2調査区の出土遺物.....	19
6. 第3調査区.....	20
IV ま と め.....	20

図 版

挿 図 目 次

- 図1 遺跡の位置
- 図2 周辺の遺跡分布図
- 図3 遺跡付近の地形図
- 図4 調査地付近の地図
- 図5 発掘調査地区設定図
- 図6 調査区基準点位測定図
- 図7 第1調査区遺構実測図
- 図8 SB02平面実測図
- 図9 SB03平面実測図
- 図10 SK01実測図
- 図11 石製品実測図
- 図12 第1調査区出土遺物実測図(1)
- 図13 第1調査区出土遺物実測図(2)
- 図14 第2調査区遺構実測図
- 図15 第1・第2調査区建物遺構配置図(1)
- 図16 破石実測図
- 図17 第1・第2調査区建物遺構等配置図(2)

図 版 目 次

- 図版1 遺跡遠景・遺跡近景
- 図版2 遠景・近景
- 図版3 第1調査区発掘・第2調査区発掘
- 図版4 第1調査区・第1調査区
- 図版5 第1調査区・第1調査区
- 図版6 第1調査区・第1調査区
- 図版7 第1調査区・第1調査区
- 図版8 柱間の狭いSBとSD01・SD01
- 図版9 SB01柱穴の重なり・SB01柱穴
- 図版10 柱穴跡・青磁片出土状況
- 図版11 SB01柱穴跡・SB05柱穴跡
- 図版12 SK01・SB05
- 図版13 第2調査区・第2調査区
- 図版14 第3調査区・第3調査区
- 図版15 出土遺物
- 図版16 出土遺物
- 図版17 山土遺物

I 遺 跡 の 位 置

小無田遺跡の所在する地籍は島根県松江市山代町字小無田311-1、311-2、302-2他で、現状は畠である。

県都松江の郊外に設置された島根県立八雲立つ風土記の丘センターに近い場所で、センターから北の方向に300mのところである。このあたりではひときわ高い標高171.5mの茶臼山の南麓にあたる位置である。また、意宇平野の西縁低丘陵上である。出雲国府跡の北側に立って西を見るとき『出雲國風土記』にのる正西道推定地の延長線上が小無田遺跡である。標高は20m内外である。

周辺には、今春「各田部臣」銘の円頭大刀が発見された岡田山古墳や出雲臣の氏寺と目される山代郷新造院（四王寺跡）、山代郷正倉跡等出雲国造の本拠地に似つかわしい古代の遺跡が広がっている。^{注1}^{注2}

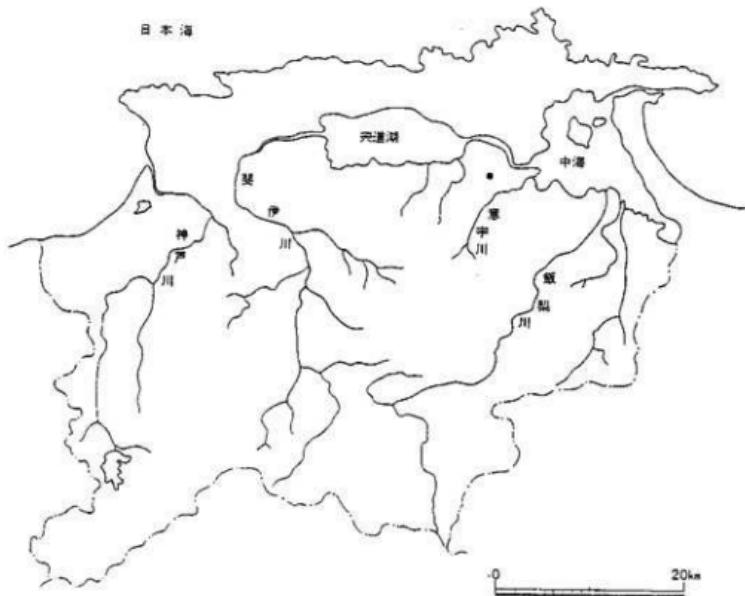


図1 遺跡の位置（・印が小無田遺跡）

Ⅱ 調査に至る経緯

八雲立つ風土記の丘一帯は古代出雲國の政治文化の中心地であったこともあって、先述のように県内にあっては遺跡の密集地の一つである。しかし、県都松江市の南郊に位置している関係で、近年宅地化がとみにすすんでいる。

そこで、県教育委員会では遺跡の保護を図るために基礎資料を得ることを目的として年次計画で発掘調査を実施することとした。その対象は都市計画区域のうち宅地化の予想される地域とした。そして『出雲國風土記』の記載等を参考に出雲國造の居館跡、黒田駅跡、意宇軍団跡、山代郷新造院跡（四王寺跡）等の所在と範囲を確認することを目標とした。

本年度は三年目で、意宇平野西線の小無田遺跡を調査地に選定した。この場所は広い範囲が畠地として残っていることと須恵器片の他かつて瓦片や埴が採集されていることなどから意宇軍団跡や黒田駅跡、山陰道跡の存在が予想されることから選定した。

字小無田の周囲には字团原・字鍾錠・字寺ノ前・字下りなどの小字名がある。



図2 周辺の遺跡分布図

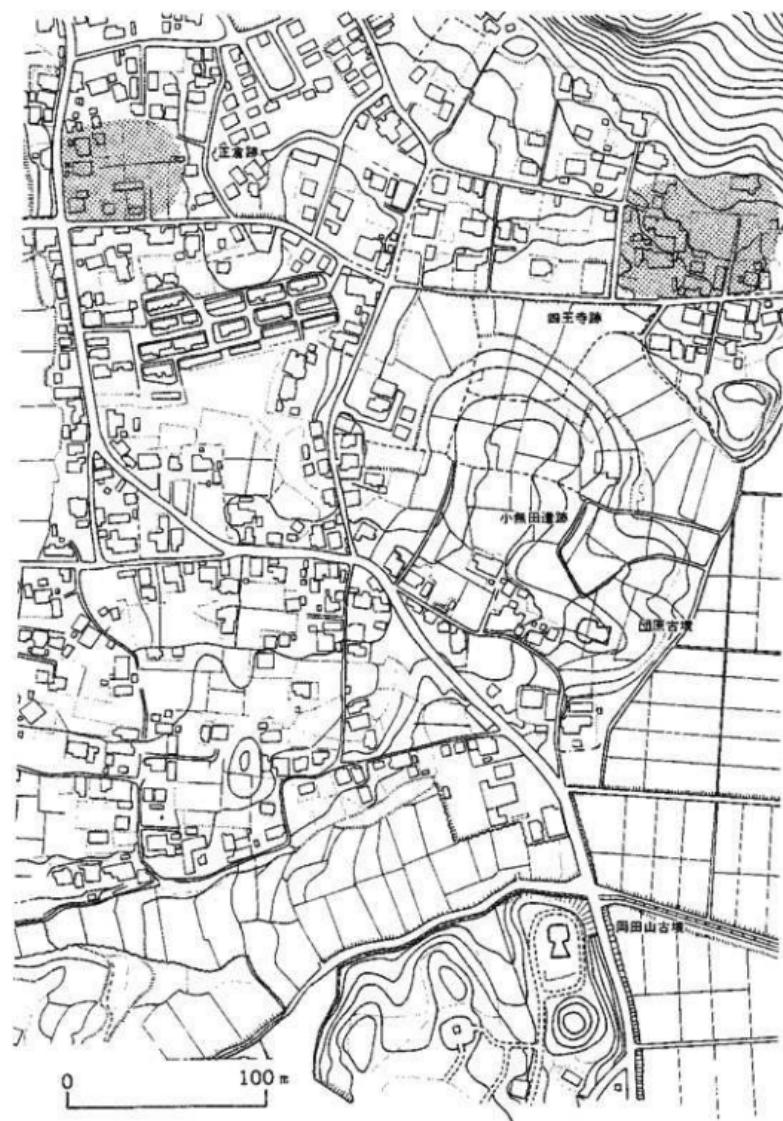


図3 遺跡付近の地形図

III 調査の概要

1. 調査区の設定

発掘調査地は松江市山代町302-2、311-1、311-2、312、306等でそれぞれの土地所有者は秋山寧、角敏郎、友田忠一、梅原義夫の各氏である。これらの場所はちょうど友田忠一氏宅の北側の畠地で、台地を通る道路よりも南側を対象とした。平坦地のうちでは南半分のところである。この調査地の西側と北側は細長い谷が続き、南側と東側は意宇平野の西縁につらなっている。調査区の基準点は、山代町水野マンション屋上と真名井神社参道に設定した国土基本座標(第Ⅲ系)から座標を移して、これを南北の基準にして調査地区を設定した。移した南北の基準点BはX=-63K

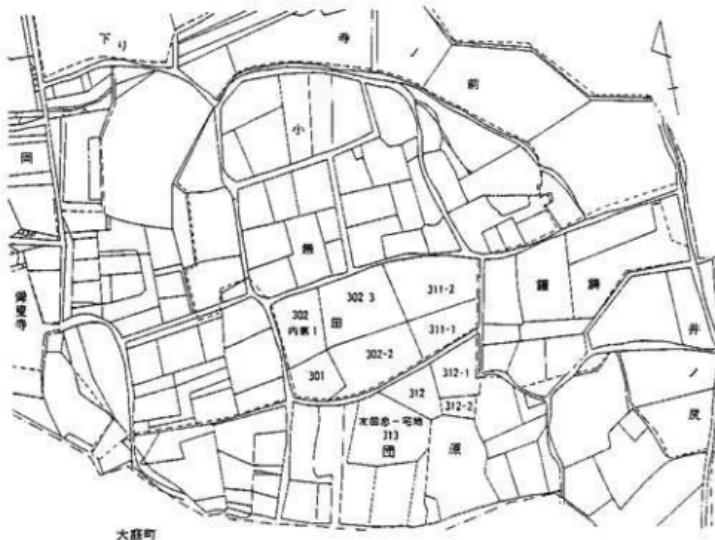


図4 調査地付近の切図（地番を示したところが調査地）

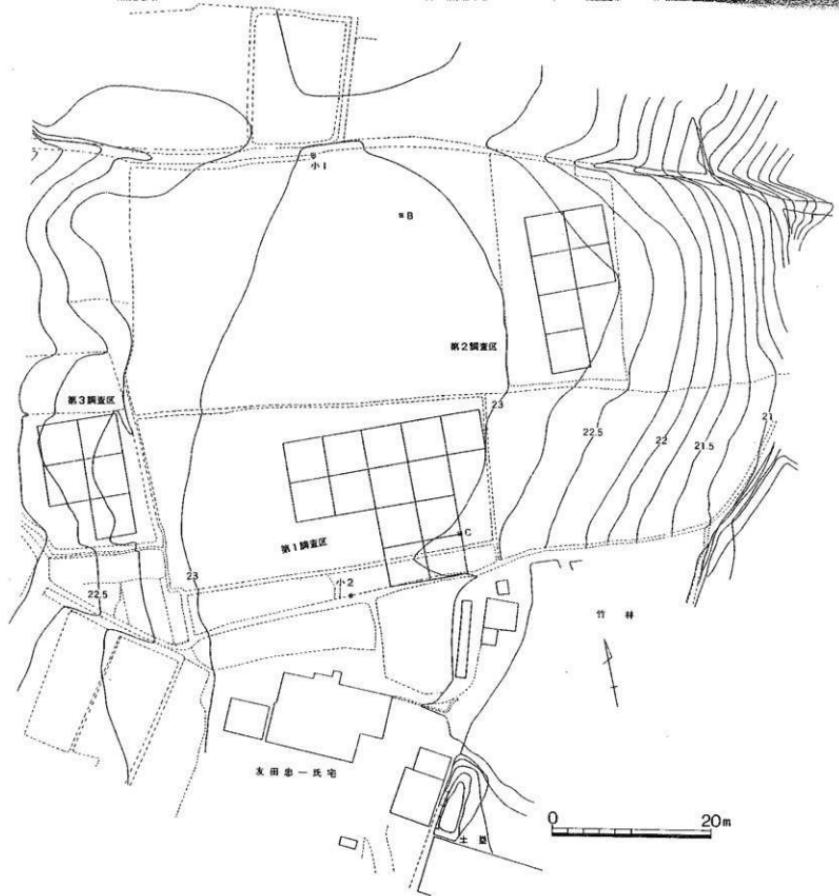
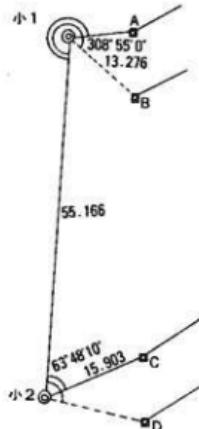


図 5 発掘調査地区設定図

調査区設定基準座標等表



基準点	X 座標	Y 座標	高さ	水平距離
小 1	-63 060.683	84 150.542	23.073 m	小 1 ~ 小 2 間 55.166 m
小 2	-63 115.581	84 145.108	23.189 m	
A	-63 060	84 160		小 1 ~ A 間 9.483 m
B	-63 070	84 160		小 1 ~ B 間 13.276 m
C	-63 110	84 160		小 2 ~ C 間 15.903 m
D	-63 120	84 160		小 2 ~ D 間 15.534 m

図 6 調査区基準点

070 Y = 84 K 160、基準点CはX = -63 K 110 Y = 84 K 160である。調査区は大きくは当初4調査区を設定する計画をしたが、実際には3調査区を設けた。それぞれを第1調査区、第2調査区、第3調査区と呼ぶこととした。その配置は図5のとおりである。小区画は一辺5mの方眼とした。

調査の方針は地下遺構の遺存状況の把握と遺構の性格の一端を知ることとし、検出した遺構は必ずしも完掘しないこととした。

2. 第1調査区の遺構

字小無田302-2、311-1、306に設定した調査区で、今回発掘調査した調査区では最も大きい調査区である。T字形に近い調査区で、広いところで東西25m、南北20mである。

遺構は地表下15~20cmの耕作土直下にある。耕作土は灰黒色で、その下は黄褐色土である。検出した遺構は堀立柱建物跡、多数の柱穴跡、溝、土塁等である。

堀立柱建物跡

S B 0 1 第1調査区で検出した堀立柱建物跡では最も柱穴の深いしっかりしたものである。東西棟で、N-67°-Wの向きである。東西5間（柱間心心距離2.1m）南北1間（柱間心心距離4.0m）ある。東西方向は5間以上の可能性がある。柱穴の堀り方は地山上面では径0.9~

0.7 mの不整形な形、底面では径 2.0 cmの円形となる。深さは凡そ 0.7 ~ 0.85 mである。柱穴跡を中心で切った断面形はロート状となる。

この建物跡の北側柱列に沿った北側にはほぼ同規模で同形状の柱穴列が 5 間ないし 6 間以上ある。主軸は N - 70° - W である。柱間心心距離はほぼ 2 m である。SB01 に先行する時期のものである。

SB02 東西 3 間（柱間心心距離 3 m）、南北 2 間（柱間心心距離 2.35 m）の掘立柱建物跡である。柱穴跡の上端直径は 4.0 cm、地山からの深さは 25 ~ 46 cm である。主軸は N - 81° W である。北側柱の東から 2 番目は柱穴跡内に棗石大の石が置かれていた。

SB03 東西 3 間（柱間心心距離 1.6 ~ 1.7 m）、南北 1 間（柱間心心距離 3.6 m）の掘立柱建物跡である。柱穴跡の直径はほぼ 3.0 ~ 4.0 cm、地山からの深さは 4.0 ~ 6.0 cm である。柱穴跡には礎がいくつか入っているものが認められた。主軸は N - 67° - W である。

SB04 東西 2 間以上（柱間心心距離 2.6 m）、南北 1 間（柱間心心距離 2.8 m）の掘立柱建物跡で、柱穴跡掘り方の直径は 7.0 cm ある。主軸は N - 59° - W である。

SB05 確実に掘立柱建物跡になるかどうか疑わしいが、一応ここでは建物跡として扱う。東西 1 間（柱間心心距離 4.1 m）、南北 2 間（柱間心心距離 2.6 ~ 2.7 m）以上あるもの。柱穴掘り方の直径は 0.9 ~ 1.2 m あり、地山からの深さは 3.0 m ある。

SB01 ~ SB05 の掘立柱建物跡のうちほぼ同方向のものは SB01 と SB03 のものである。第 1 調査区内の東側寄りに、主軸が N - 87° - W となる同方向の柱穴列が 11 条検出されている。東西方向の柱穴跡の間隔は柱間心心距離で 8.7 cm、南北方向の柱穴跡の間隔は柱間心心距離で 1.7 m ある。柱間間隔の狭いこと、南北方向の柱通りがそろわないことに特色がある。柱穴跡の深さは地山面から 1.0 cm 以内と浅い。これらの柱穴跡内の上面では植物の種皮がかたまって検出されたことも特徴的である。

土 坡

SK01 第 1 調査区の西寄り部分で検出された土坡である。不整形な長細い平面形をするものである。東西方向の最大長さ 2.5 m、南北方向の最大長さ 1 m のもので、地山面からの深さは 3.0 cm ある。この土坡内からは須恵器・壺片、土師器片・土製支脚片等が散乱した状態で検出された。この土坡は埋められたあとにいくつかの柱穴が掘りこまれている。

SK02 第 1 調査区の東寄りの部分で検出された土坡である。主軸を N - 66° - W とするもので、東西 1.45 m、南北 0.85 m の長方形プランを有するものである。地山面からの深さは 3.0 cm である。土坡内から遺物は発見されなかった。SB01、SB03 と主軸がほぼ同方向であることが注意される。

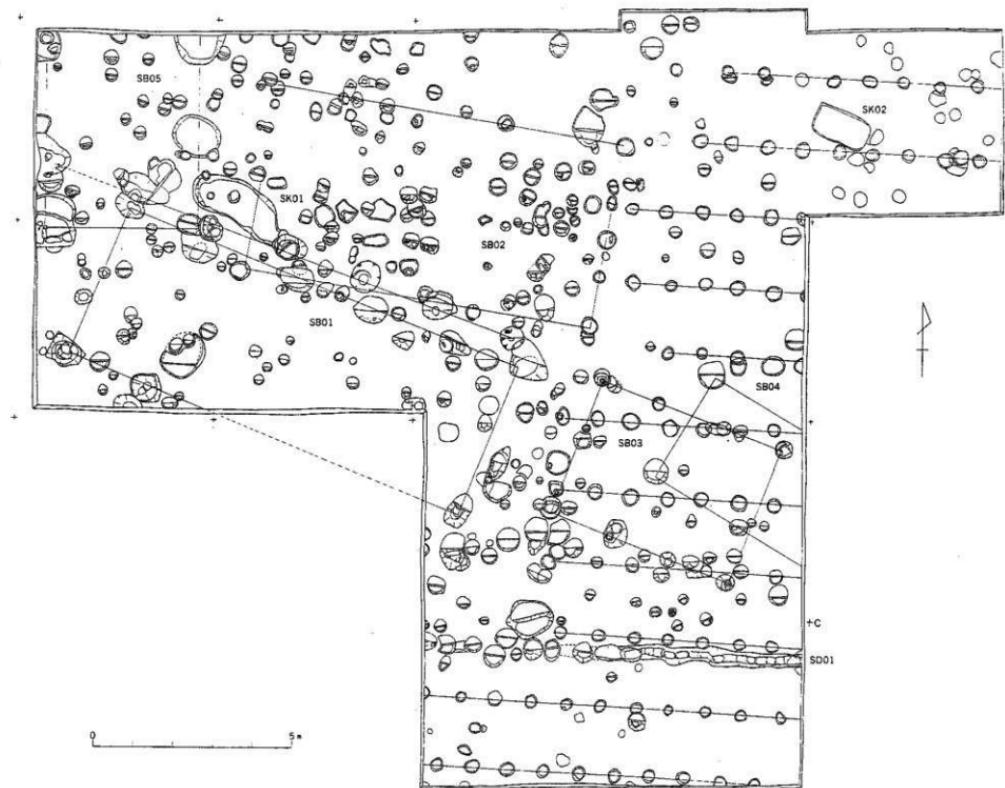


图 7 第1调查区造構実測図

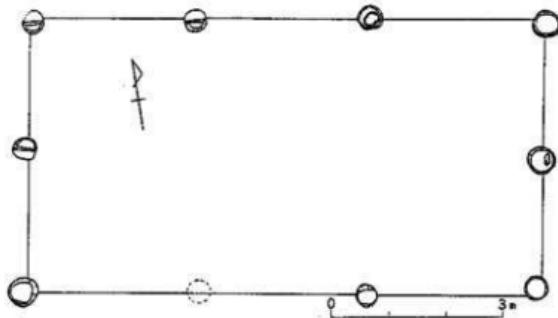


図 8 S B 0 2 平面実測図

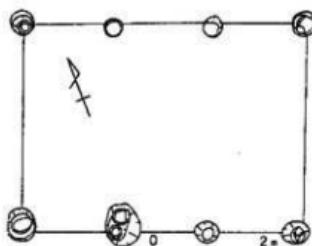


図 9 S B 0 3 平面実測図

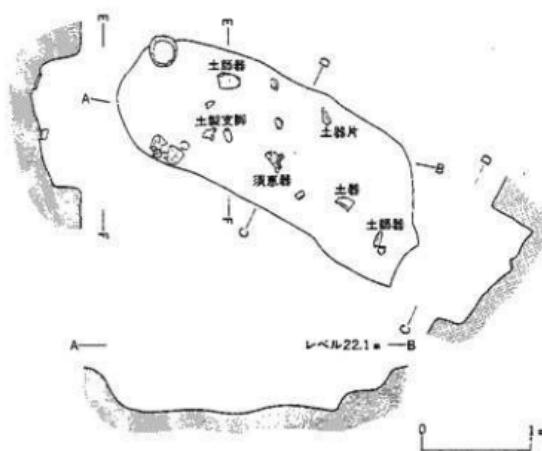


図 10 S k 0 1 実測図

溝状遺構

S D 0 1 調査区の南寄りの部分で検出したものである。幅は上幅 40 cm、下幅 20 cm ほどのもので断面形状は U 字形に近い形状である。深さは 20 cm である。全体を完掘しなかつたが、農具（鍬か鋤が考えられる）で掘ったあとが明瞭であった。

今回の調査で発見された唯一の溝状遺構であるが、この南側で、幅の狭い条状の跡が何本も認められた。この条状の跡は 1 つの可能性として、縦と考えられなくもない。

改めて付近の区画、形状をみると、区画が短冊形であり、現在も狭いながら道があることはかって幅の広い道路があったことを示唆するかもしれない。

3. 第1調査区の出土遺物

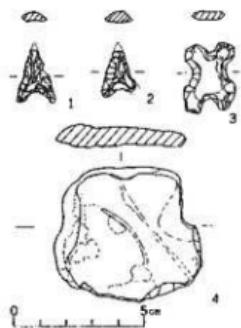


図11 石製品実測図
石製品（図11）黒曜石製石鎌が2点ある。大きさ2cm程度のもので、側縁は等辺をなし、先端部はいずれも欠損する。基部の切り込みが著しく、一次剥離後側縁に細かい調整剥離をおこなっている。X字形石製品は全長2.5cm、幅2cm、厚さ0.3cmある。石材は硬質砂岩である。第1次剥離後片面のみ四方から調製剥離をおこないX字形を作るが、切り込み部分を除けば第1次剥離面が残っており、未製品あるいは粗雑品の印象を与える。このようなX字形をする石製品の例としては、島根県隱岐郡海士町の郡山遺跡、鳥取県西伯郡蓬坂遺跡の例が知られている。

石錐は扁平な自然縫の両端を一部打ち欠いたもので、大きさは5.5~5cm、厚さ0.9~0.7cmある。石材はホルンフェンスである。両端の打ち欠き以外の加工はほどこされていない。この他、円錐の一部が欠けたものも数点あり、石錐として用いられた可能性も考えられる。

須恵器 高台付壺の破片がある。（図12-7、8）糸切り痕はみえない。

造構に伴う（とみられる）ものには須恵器片、土師器片、土製支脚、瓦片、陶磁器片、土師質土器片、植物の殻等がある。

今回の調査で最も目立つ遺物はSK01から出土した遺物である。この土地からは須恵器・壺片・土師器・壺片・土製支脚等が出土している。（図12-1~5、8）

須恵器・壺片 1は口径14.7cmで肩部以下に叩き痕があり、内面には青海波文がある。口縁は短く、くの字状に外反し、端部はやや丸味をもつ。口縁と肩部の接合部分は器壁の厚みが異なるほど明瞭で、肩は張るものである。肩部最大径は27.5cmある。2は口径19.8cmで、口縁部と肩部との境付近には高まりがある。そして肩部と口縁部の接合された部分では器壁は1.8cmと厚い。外面は自然釉をかぶるが、叩き痕はみえる。内面には青海波文がある。

土師器・壺片 3は口径25cmで、口縁部はゆるく外反するもので、肩部は丸味をもつ。外面はたて方向の刷毛目調整痕が明瞭である。内面はへらで削って器厚を整えている。

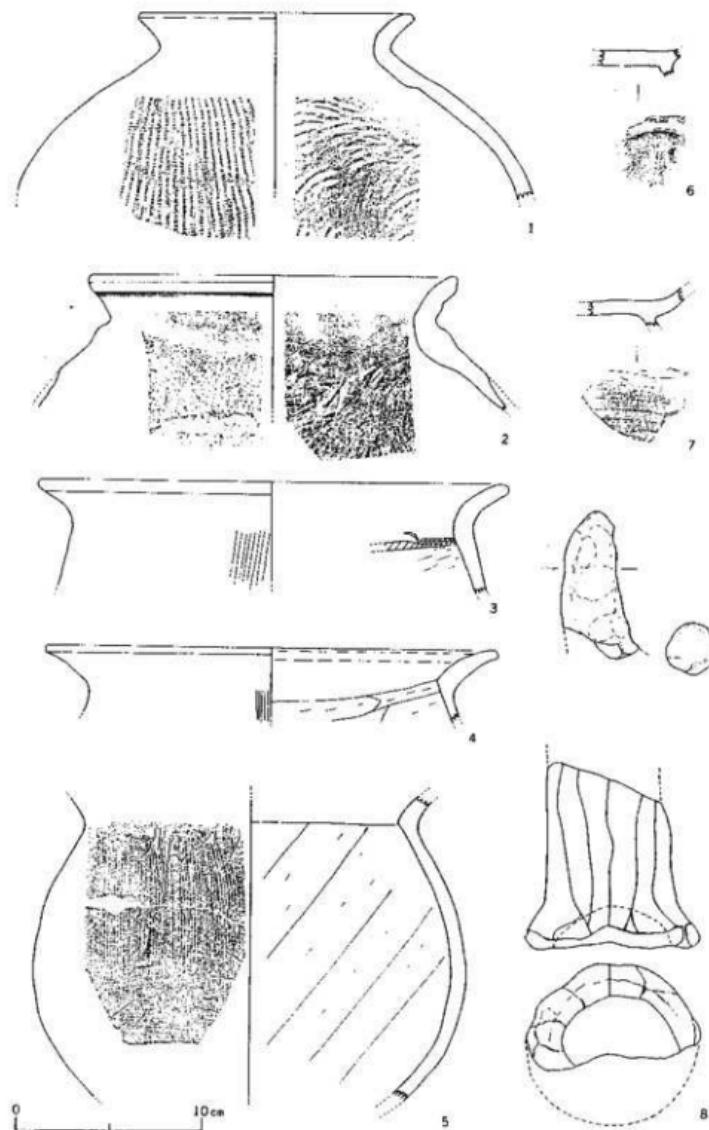


图12 第1 調査区出土遺物実測図 (I)

4は口径24.2cmで、口縁はきつく外反するものである。外面は3同様のタテ方向の刷毛目がみえる。内面のへら削りは口縁部との境に著しい屈曲がある。5は胴部最大径23.2cmで、外面は口縁に近い方は刷毛によるタテ方向の調整、下方側は斜方向にクロスする刷毛目調整がみられる。内面はへら削りで、頸部においてはくの字に屈曲する断面形状である。胴部は球形に近いものである。

土製支脚 8で、角が2つつくものらしい。高さが10数センチメートルとなるものと/or/、脚部の直径は6.6cm、脚の底部はすこし広がり径9.4cmとなる。底面は内に2cm凹んでいる。角は径3cm余で、長さは8cmある。全体に指頭による整形痕が目立つものである。

瓦 平瓦の小片で、布筒の布目痕がつくものである。

土師質土器 底部に糸切痕のある皿や环の破片が出土している。

陶磁器 今回の調査では中国陶磁と日本陶磁の両方が出土している。^{注4}

中国陶磁 中国製の青磁が4点出土している。いずれも碗片である。無文の碗と蓮弁文碗と考えられるものがある。鍋が消えて簡便となつたものは、見込みに花内文が押印してある。高台内が露胎となっているのは表面採集資料にも共通した手法である。こうした青磁は島根県内では徐々に増加している資料である。大抵把ない方をするとこれらの資料を14～15世紀のものと見ても現時点では大過ないと思われる。他の資料でこれ以上古い時代観をいだかせる積極的な資料は見当らない。

日本陶磁 濑戸・美濃の灰釉小皿と見られるものが2点出土している。細かい時代をいうことは困難であるが、当地方でも16世紀に入ってこの形式のものの出土が確認され、17世紀には他の形式のものが多いことから、16世紀に属するものと考えられる。その他の陶磁器は近世に入っての所産である。中でも古いのは唐津焼の皿で、耕作土下の層から出土している。これは17世紀前半の所産になるものであろう。白釉を被った陶片はその産地は不明であるが、他の遺跡の例からするとセッタになる17世紀前半の遺物の中に散見されるものである。

他では肥前磁器（伊万里）系の皿が確認される。江戸時代の中期をさかのぼるものではなかろう。

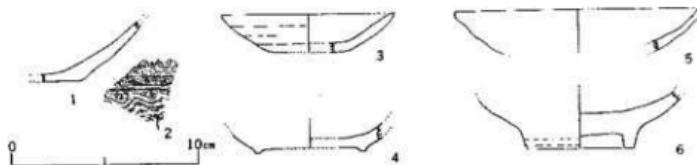


図13 第1調査区出土遺物実測図(2)

白濁した緑釉の被った資料が出土しているが、江戸時代後期以降の地元窯の製品と考えられ、茶褐色のものも類似の時代であろうと思われる。これらの他にも染付をもつ磁器や白磁碗などがある。

植物の種皮 第1調査区からは植物の種皮が多量に発見されている。この植物の種皮は柱間間隔の狭い柱穴列の柱穴跡内に限って出土している。耕作土である黒色土と遺構面である茶褐色土の間に中心に検出された。植物の種皮を含む土壤を持ち帰り、水洗選別した後、島根大学理学部生物研究室松村喜則講師に鑑定していただいた。

この種皮は外面が黒色ないし黒茶色でところどころに白っぽい斑点状のものがあり、内面は薄茶色のものである。明らかに何かの実を割ったものと考えられる。この種皮とよく似たものにエゴの実があるが、エゴは実が小さく表面にはしわがみられ、実の一部が尖っている。しかし、出土した種皮はその断片からみてもエゴの実よりも大きく表面にはしわ状のものがみられず尖った形跡もない。従って、この種皮はツバキの実の種皮と考えて良かろうという鑑定結果であった。

土地所有者の話では、ツバキを植えたこともなく、またそのような話を聞いたこともないということであったが、柱穴内に限って出土する点は注意される。ツバキの種皮は、柱の防腐・防虫的な面で効果があるのかどうなのか今後の類例を待って検討する必要がある。

なお、石錠の石材はホルンフェルスが用いられていると記したが、現在ホルンフェルスの産地は島根県と山口県の県境に近い山口県阿武郡須佐町の断崖に露出しているのが著名である。島根県東部ではホルンフェルスそのものが珍しく、それが石材として用いられている点注目される。石材の鑑定は島根県立松江北高校教諭三島欣二氏にお願いした。

注1 島根県教育委員会『出雲岡田山古墳』1984

注2 島根県教育委員会『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』1975

注3 近藤 正「寺跡」(『島根県文化財調査報告第5集』1968)

注4 島根県教育委員会「富田川河床遺跡発掘調査報告」1977

など

4. 第2調査区の遺構

南北方向に20m、東西方向に10mの調査区を設定し、そのうち東南側の南北10m東西5mの部分を除く150m²について発掘調査を実施した。この結果、一部分に耕作による擾乱をうけた部分があったが、ほぼ全面において柱穴等の遺構を検出した。遺構面は耕作土直下の、現在の地表面から15~20cmの深さの部分である。

この調査区で検出した遺構も第1調査区と同じような東西方向の柱間間隔の狭いほぼ主軸の方向が等しい遺構が目立っている。

建物跡

SB10、SB11、SB12、SB13、SB14はほぼ同方向に並ぶ建物跡と思われる。東西方向の軸は凡そN-87°~88°-Wである。検出した柱穴の深さは地山面から、10cm以内である。調査区内で検出したのはいずれも一部である。

SB10 東西4間以上（柱間心心距離0.9m）南北1間（柱間心心距離1.8m）のものである。柱間は東西及び南北でいくらかずれる。柱穴跡の直径は30~40cmである。

SB11 東西3間以上（柱間心心距離0.9m）南北2間（柱間心心距離2.75~2.8m）である。総柱建物跡のようである。柱穴跡の直径は30~40cmである。

SB12 東西2間以上（柱間心心距離0.9m）南北1間（柱間心心距離1.8m）である。

SB13 東西5間以上（柱間心心距離0.9m）南北1間（柱間心心距離1.75m）である。

SB14 東西2間以上（柱間心心距離0.9m）南北1間（柱間心心距離1.7m）である。

これらの建物の他により地山を深く堀りこんだしかも建物の方向も異なる建物跡がある。

SB15 東西2間（柱間心心距離1.05m+1.55m）南北1間（柱間心心距離2.1m）である。東西方向の軸線はN-79°-Wである。柱穴跡の直径は20~30cm。地山面からの堀りこみは20cmである。

SB16 東西1間（柱間心心距離3.1m）南北1間（柱間心心距離7.55m）と考えられるもので、東西方向の軸線はN-86°-Wである。

SB17 東西1間（柱間心心距離2.1m）南北1間（柱間心心距離2.0m）で、東西方向の軸線はS-85°-Wである。

SB18 東西1間（柱間心心距離1.9m）南北1間（柱間心心距離2.5m）の建物跡である。東西方向の軸線はS-89°-Wである。

他に調査区の南端で直線的につながる柱穴跡がある。また、柱穴跡も多数認められているが、柱穴跡規模の大きなものや方形の堀り方をもつものは検出されていない。

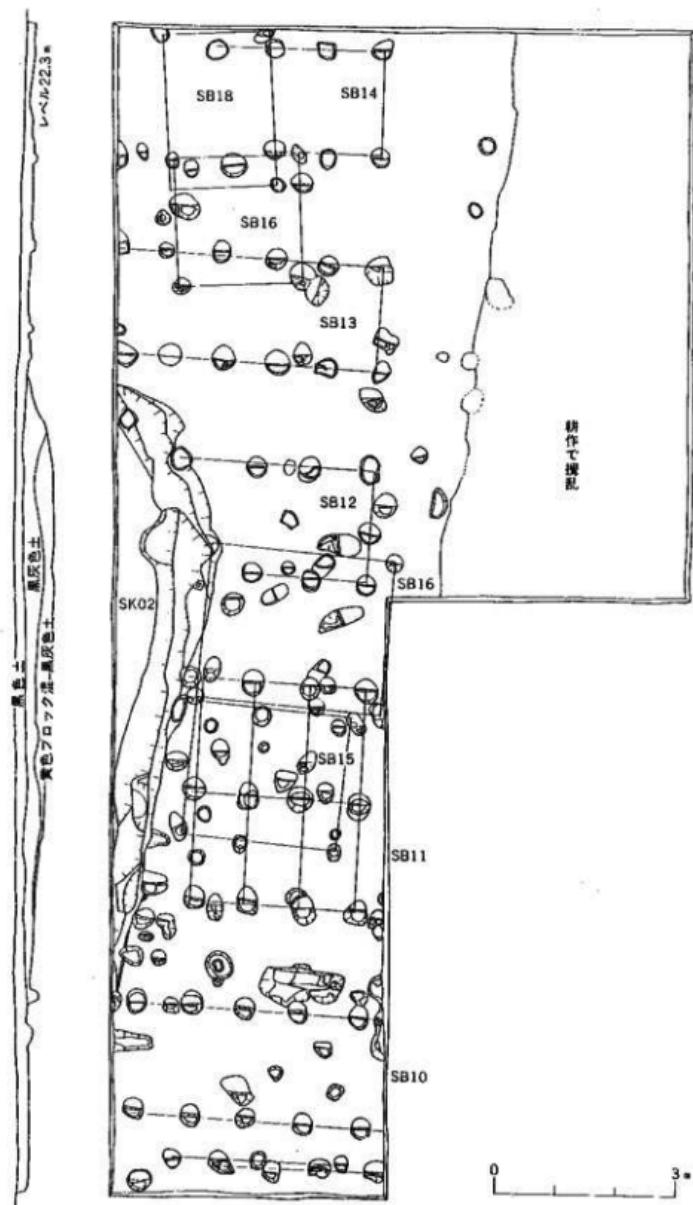


図14 第2調査区遺構実測図

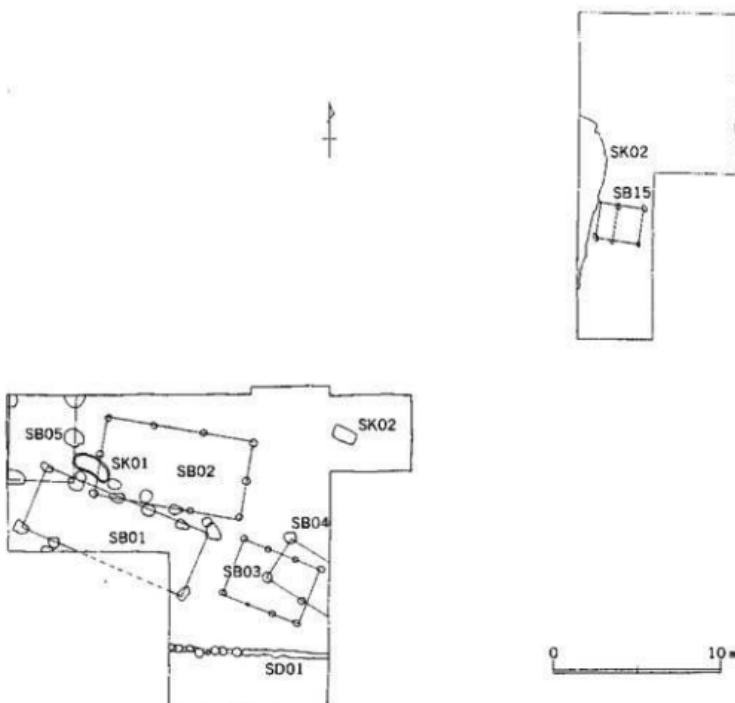


図15 第1、第2調査区建物遺構配置図(1)

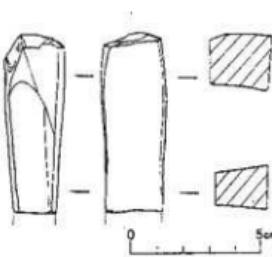


図16 砥石実測図

土壟状遺構

SK11 第2調査区の中では西寄りで検出されたもので、南北方向 1.03m、東西方向は広いところで 1.6m、深さは地表面から 6.5cm、地山面から 4.5~5.0cm ある。部分的な発掘のため平面形は不明である。

土層の層位についてみると上層は黒色土の耕作土 1.0~1.8cm、中間層は黒灰色土の 2.0~3.0cm、下層は黄色ブロック混じりの黒灰色土層 1.5~2.0cm である。堀りこみはなだらかな斜面をもつものである。

この土壟内からは陶磁（染付）片や須恵器片が出土している。おそらく陶磁片がこの土壟のつくられた時期を物語るものであろう。

また、この土壟の性格については、不明である。大きいものであることが特徴である。

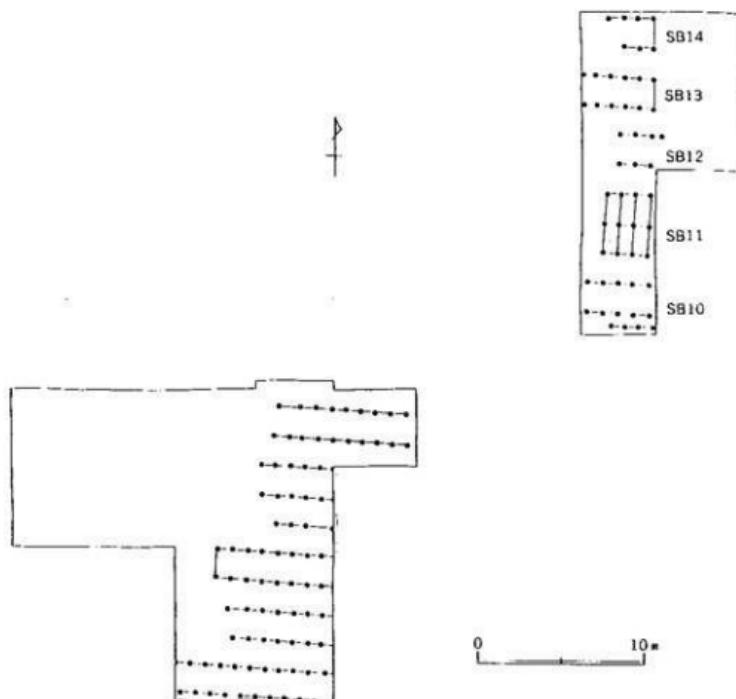


図17 第1、第2調査区建物遺構等配置図(2)

この調査区の北寄りの東側部分は耕作時の擾乱で遺構は検出できなかった。

5. 第2調査区の出土遺物

この調査区でも第1調査区と同じように表面採集や耕作土中からの出土と遺構に伴うとみられる遺物がある。

表面採集や耕作土中の中には須恵器片、土師器片、土師質土器片などがある。SK11からは染付片が検出されている。

目立つものに砥石がある。これはSB17の南西の柱穴内におちこんでいたもので、多量の炭化物とともに検出された。残存長6.5cmで中途で欠損したものである。現存重量61gある。現状はほぼ四角柱状をなし、三面が砥石として使用されており、残る一面はこの製品が欠損したときに破壊をうけたためか石材の原状を示している。端面は一部に欠損がみられるが、底面が観察されるこ

とから、この砥石の端部である。この砥石は端部を手元においていたとき、やや右下り気味に中央にかけて磨滅がみられる。そして、砥面には刃物を磨いた際に熱で焼結して黒くなった部分がある。

石材はホルンフェルスとみられるが、断定できない。

6. 第3調査区

第1調査区の西方、図5のBとCを結ぶ基準線から20m離れたところから設定した調査区である。平坦面から斜面となる部分にあたり、第1調査区で検出した建物跡等を区画する棚や溝を期待した。

調査の結果、75cmばかり掘りさけたが、この調査区は全域にわたって天地がえしが実施されており遺構はすでに破壊されていると判断された。土層は上から20cmほどの耕作土、中間は20cm深いところでは30~40cmの黒色土、下層は25cmほどの黄褐色粘質土となっている。

この調査区からは表面や擾乱された土中から須恵器片、陶磁器片、土師質土器片を検出した。しかし、小片であった。

IV まとめ

昭和58年度の発掘調査は風土記の丘地内の遺跡についての第3年次目の緊急調査である。調査成果についてまとめるところのようである。

(1) 調査対象とした小無田遺跡一帯の低丘陵地はこれまで須恵器や土師器などの破片が散在しており、散布地として知られていたが、今回の発掘調査によって耕作土下に遺構が良好な状態で存在することが判明した。調査の結果推測するに遺構はこの低丘陵地全体に広がっているとみられる。

(2) 発掘調査によって検出された遺構の性格については、部分的な発掘調査のため全貌を明らかにすることは困難である。検出された部分的な遺構から推測されることを推測の域を出ないがおよそ次のことが考えられる。

獨立柱建物跡についてみるとSB01が最も大形のものであろう。柱跡の掘り方は上端が大きくて下端は小さいものである。深さは胸がすっぽり肩まで入る深さで70~80cmぐらいある。しかし、柱の太さは直徑20cm内外と小さいものであり、柱を埋めた掘り方に版築などはみられない。一部の掘り方には柱の固定に用いたかと思われる跡がいくつか入っていた。

SB01の建物跡は調査した範囲では全体を知ることができないが、柱穴跡の状況からは建て替えがあったようである。廟のつくものかどうかはわからない。

SB03はSB01と同方位の建物跡で、SB01の東側に2.1m離れて建てられた東西3間(5m)南北1間(3.6m)の建物跡で、SB01と同時期に存在した可能性が考えられる。

S B 0 2 は東西3間（9.0 m）南北2間（4.8 m）の堀立柱建物である。柱跡の1つに礎石かのように柱穴の位置に1個の平たい石を置いている点注目される。S B 0 5 については S B 0 1 ～ S B 0 4 の建物跡に比較すると柱穴跡と考えているものが、調査区内で検出した他の柱穴跡に比較して円形で大きいため、土壇の可能性も考えることができ、建物跡になるかどうかは今後調査区を拡大した段階で考えねばならない問題である。

大まかにいって、これらの建物跡は古代まで遡るものではないようで、陶磁器などの遺物の検出を参考にすると、おそらく中世以降の時期のものであろうと察せられる。ちなみに松江市教育委員会による昭和58年度の山代町岡の黒田館跡発掘調査^{注4}で検出された柱穴跡は中世と考えられるというが、これに比べるといくらか貧弱である。一方、小無田遺跡の調査区の南側の竹林にのこる土壘の痕跡はこれらの遺構と関連をもつ可能性もある。

第1調査区と第2調査区で検出された柱間間隔の狭い（凡そ90cm）建物跡については地山の堀りの浅いこと、柱間間隔の狭いこと、柱跡内の上面から植物の種皮が検出されたこと等から普通の建物跡とはようすが異なるように思われる。第1調査区内では南北の柱通りが揃わず互い違いのように並ぶが第2調査区ではほぼ柱通りが揃っているという状況である。柱跡の状況からは例えば朝鮮人参栽培にみられる細長い小屋風のものが頭に浮ぶ。これも今後調査区を拡げた段階で検討されるべきである。

S K 0 1 、 S K 0 2 、 S K 0 3 という上塙の性格は不明であるが、 S K 0 1 は出土遺物が須恵器と土師器の破片等であり古代のものである可能性が強いと思われる。

S D 0 1 という溝状遺構は一部分の発掘確認ではあるが、近くに条がいくつもあったのでそれをわだらと考へ、さらに付近の地形が幅2mもしくは5mの短冊状に細長いことをも合わせ考へて積極的な推測をすると道路の側溝の可能性も否定できないようと思われる。この小無田遺跡付近は「出雲國風土記」に記載された正西道（山陰道）^{注5}が通っていたはずであるから、その存在についての1つの示唆をこの S D 0 1 はもっているかもしれない。

(3) 小無田遺跡については発掘調査着手前の段階では、近くの竹林中に巣を築く荒神や道ばたに馬鹿音さんと呼ぶ地蔵尊が存在し、地元の人によるとここらあたりは黒田駅があった場所ではないかということであった。また、近くに字田原という字名が存在することから意宇軍田跡の可能性も考えられてきた。しかし、発掘調査結果からは黒田駅跡や意宇軍田跡を証明する積極的な資料は得られなかった。

狭い範囲とはいえるが今回の調査は低丘陵地の中心地域を発掘したことになるが古代に遡る遺構は S K 0 1 のみで他にはむしろ疑問でもある。古代の遺構は後世削平されたことも考える必要があるかもしれない。

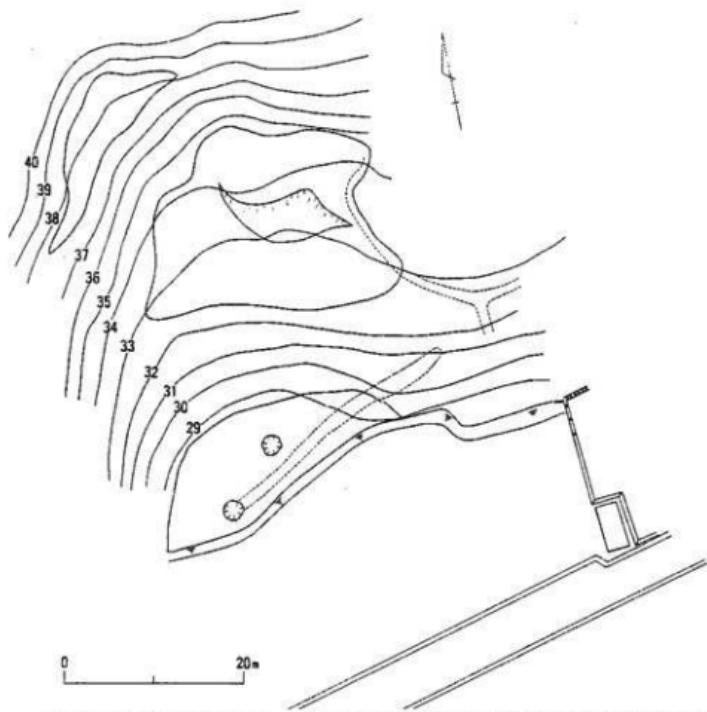


図 18 来美廃寺跡部分地形略測量図
来美廃寺は出雲國風土記所載の山代郷新造院の1つと
曰されている。所在は松江市矢田町来美

注5 松江市教育委員会『松江市の埋蔵文化財』1980

注6 松江市教育委員会『黒田館跡』1984

注7 加藤義成『修訂出雲國風土記参考』1980

図版 1



遠跡遠景(南の花木園地から)

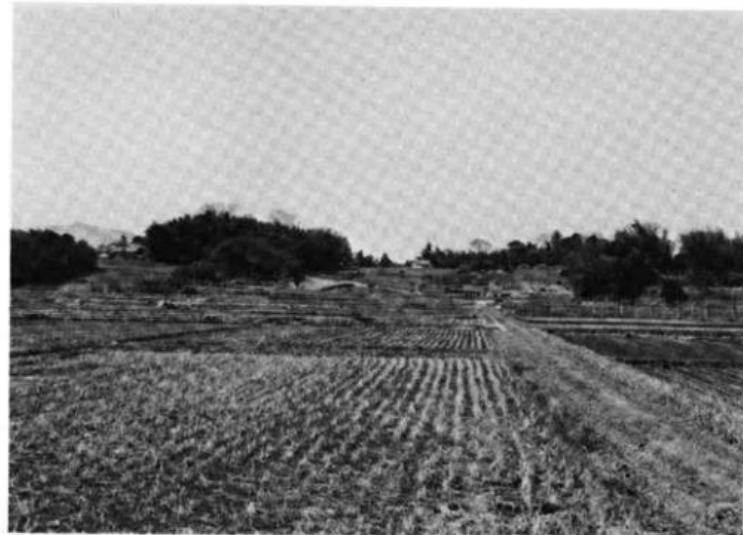


遠跡近景(意宇平野を望む)

図版 2



遠 景 (茶臼山山頂から)



近 景 (意宇平野から)

図版 3



第1調査区発掘



第2調査区発掘

図版 4



第1調査区（西寄部分・南から）



第1調査区（西寄部分・北から）



第1調査区（南寄部分・西から）

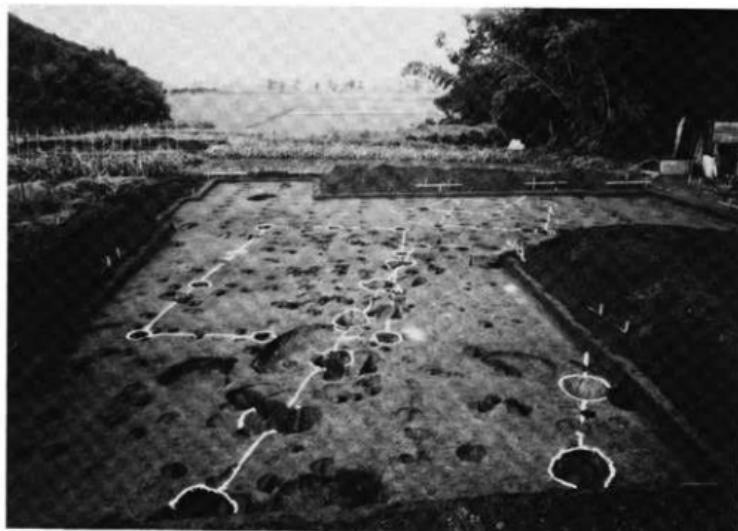


第1調査区（東寄部分・北から）

図版 6



第1調査区（西から）



第1調査区（西から）

図版 7

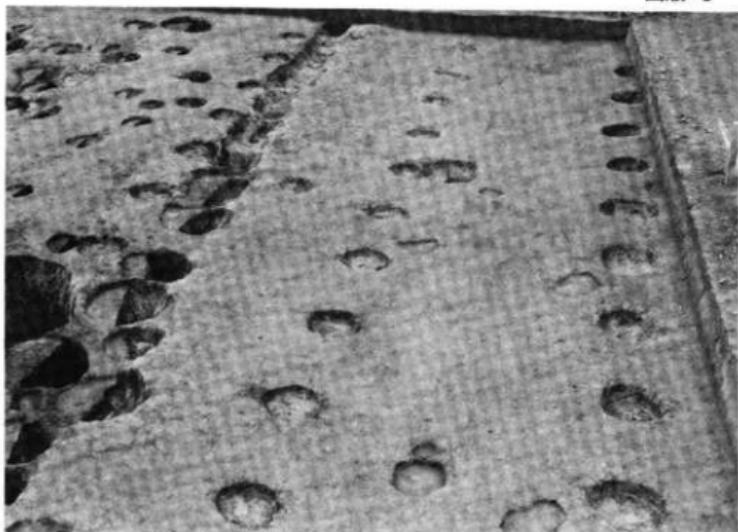


第1調査区（北から）



第1調査区（北から）

図版 8



第1調査区(柱間の狭いSBとSD01西から)

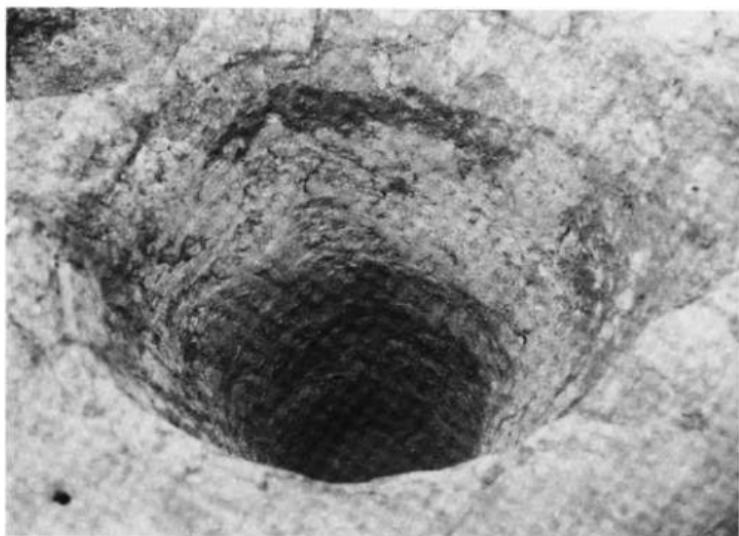


第1調査区 SD01(西から)

図版 9

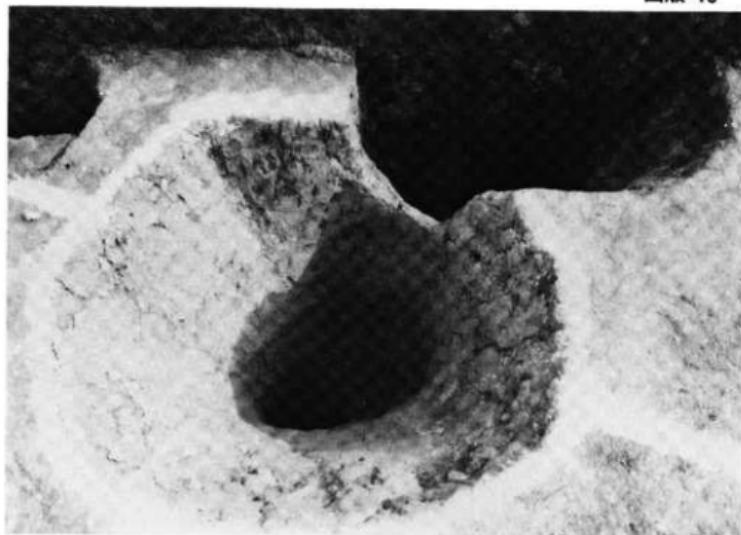


第1調査区 SB01柱穴の重なり

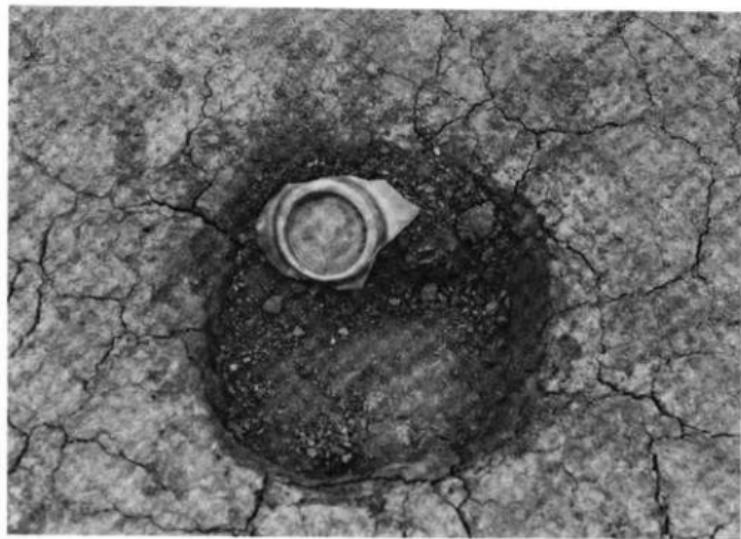


第1調査区 SB01柱穴跡

図版 10

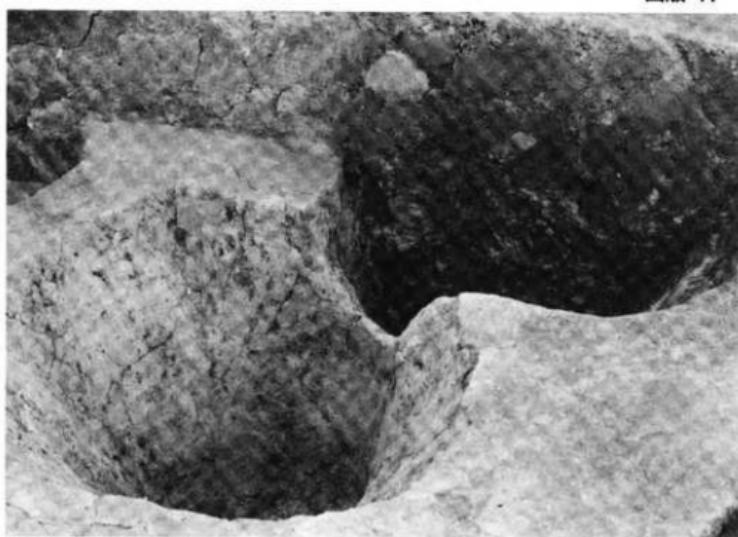


第1調査区 柱穴跡



第1調査区 青磁片出土状況

図版 11

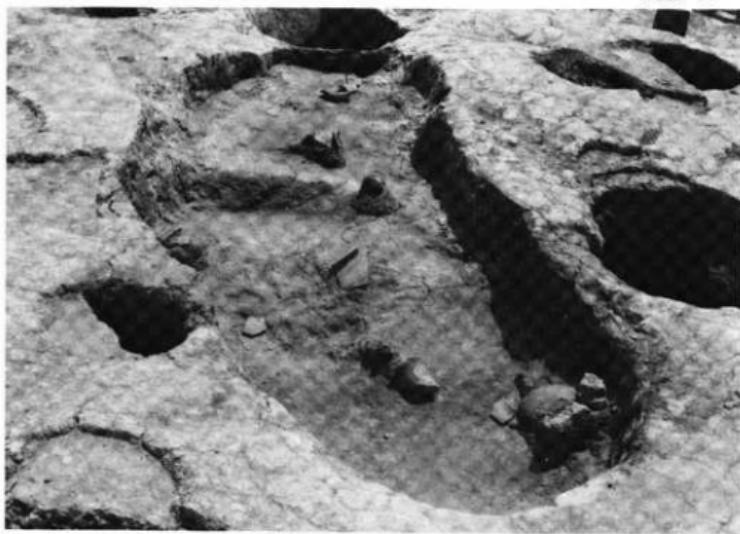


第1調査区 SB01柱穴跡



第1調査区 SB05柱穴跡

図版 12



第1調査区 SK01 西から



第1調査区 SB05 南から



第2調査区（北から）



第2調査区（南から）

図版 14

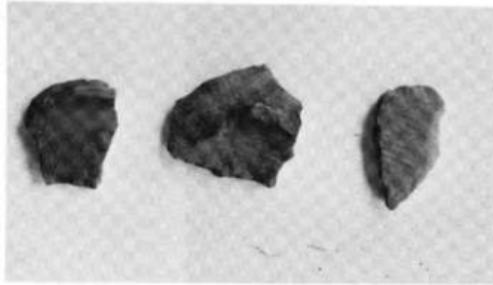
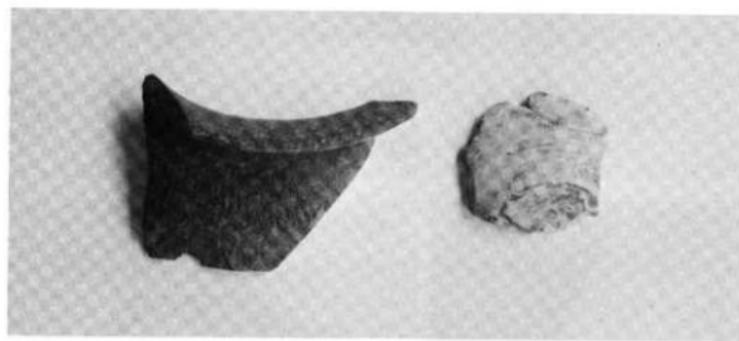
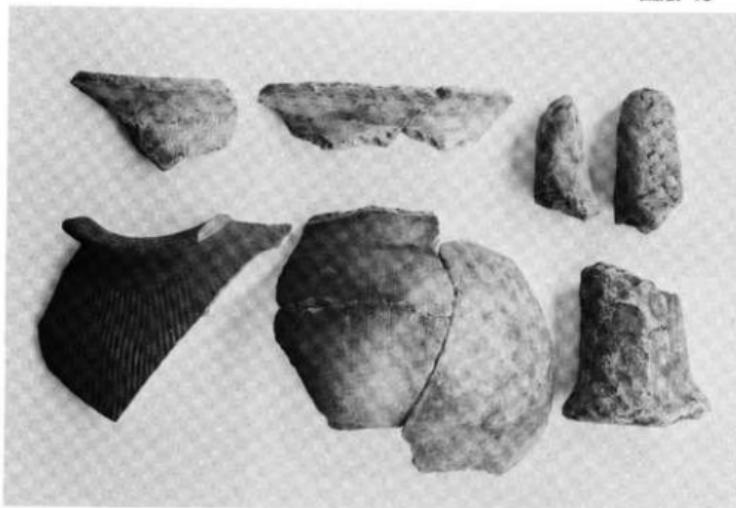


第3調査区（東から）



第3調査区（南から）

図版 15



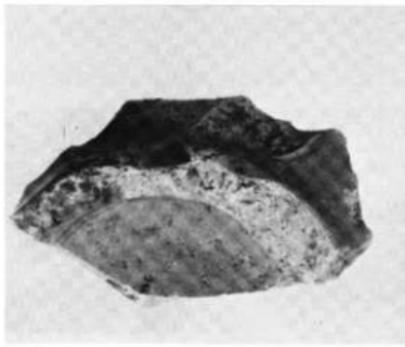
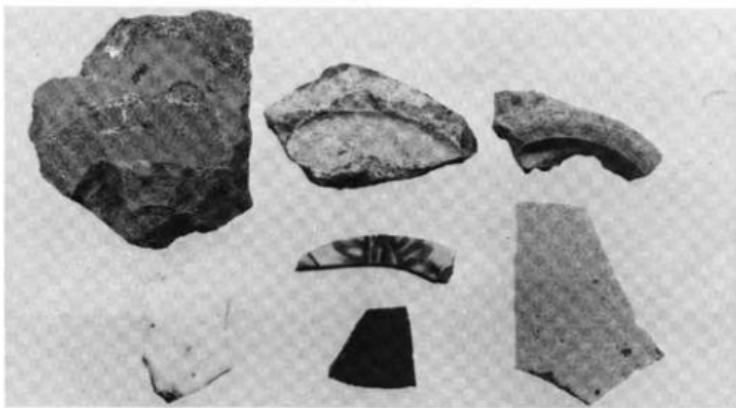
出土遺物

上 SK01出土

中 須恵器 土師質土器

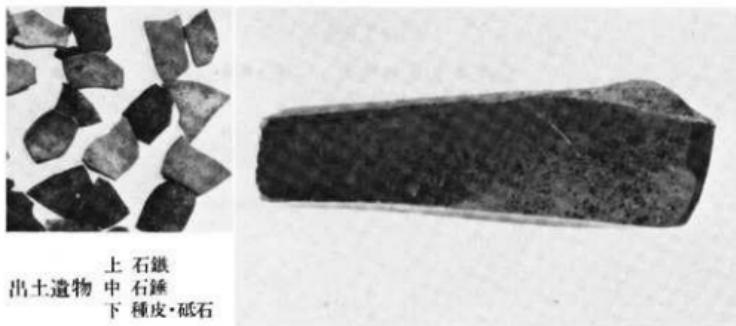
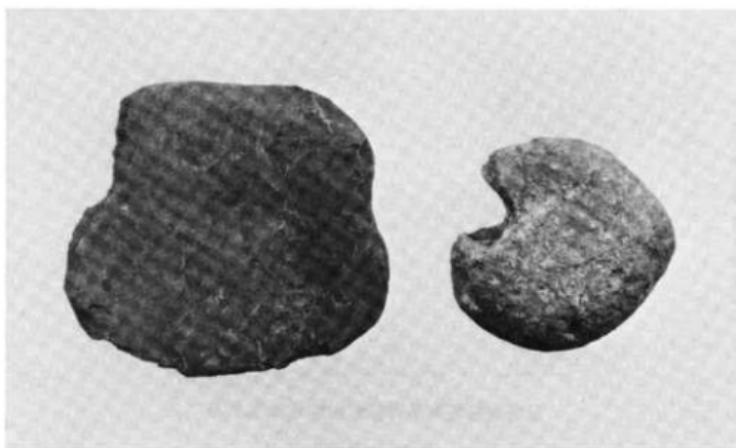
下 須恵器 高台付坏他

図版 16



出土遺物 上 青磁他
中 日本陶磁
下 青磁 白磁

図版 17



出土遺物 上 石鐵
中 石錐
下 種皮・砥石

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅲ

小無田遺跡

1984.3

編集・発行 島根県教育委員会

松江市殿町1

印 刷 協報光社

平田市平田町993